

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02967

研究課題名(和文) 英語教育・学習の動機づけ理論の精緻化に関する国際比較検証研究

研究課題名(英文) The research on the elaboration of L2 teaching/learning motivation theories: International/regional perspectives

研究代表者

木村 裕三 (Kimura, Yuzo)

富山大学・学術研究部医学系・教授

研究者番号：80304559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は英語教育と学習の動機づけ研究に援用される理論の精緻化を目的とした研究である。東アジア3か国の後期中等英語教育段階の学校英語教育現場の授業を長期参与観察し、動機づけの変遷のプロセスを、主体者(教師・生徒)と地域性(日本・中国・韓国)に着目して実施した。援用した動機づけ理論は、複雑系理論(CDST)と活動理論(AT)、複線路等至性アプローチ(TEA)である。

TEAによる教師の動機づけ解釈により、教師の英語授業への動機づけが、異なる分岐点を経て異なる径路で変遷し、教師として成長していく道程が明らかとなった。また、CDSTのメタ理論性について、ATの上位概念として位置づけることを論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまで単一の理論で解釈されていた外国語教育・学習の動機づけ研究に対し、複数の理論を援用した結果、動機づけとしての異なる風景が提示された点が学術的・社会的意義として挙げられる。とりわけ、その学術的起源と発展が異なるCDSTとTEAによる外国語教育・学習の動機づけが、教師と生徒の双方から、また、東アジアの異なる国家で異なる英語カリキュラム下で検証された点が学術的意義として挙げられる。コロナ禍の影響を受け、残された課題も少なくなく、今後の課題として取り組む。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to elaborate theories employed in examining motivation in English teaching and learning. I conducted long-term participatory observation in secondary school English education classes in three East Asian countries, focusing on the process of motivational change. The study specifically examined the role of teachers and students, as well as regional characteristics in Japan, China, and South Korea. I utilized three motivational theories: Complex Dynamic Systems Theory (CDST), Activity Theory (AT), and the Trajectory Equifinality Approach (TEA). By applying TEA to interpret teachers' motivation, I identified that their motivation for teaching English followed distinct paths at different stages, shedding light on their professional development. Additionally, I discussed CDST's metatheoretical nature and its overarching position in relation to AT.

研究分野：外国語教育(英語教育)

キーワード：複雑系理論 CDST 活動理論 AT 複線径路等至性 TEA 外国語学習の動機づけ

1. 研究開始当初の背景

研究開始当時(2017年)、第二言語習得(SLA)の分野で動機づけ研究に援用される理論には進歩が見られ、その流れが現在に至っている。その中で注目される理論の1つが「複雑系理論(Complex Dynamic System Theory, CDST)」(Larsen-Freeman & Cameron, 2008)である。CDSTは、言語習得をとりまく表象を system として捉え、その特性を open, change, adaptable, non-linear という言葉で表現し、system の変化する方向を誘導する attractor という概念を提唱する。近年この理論は一定の成果を上げてきた(Dörnyei et al., 2015)が、まだ研究開始当時は援用の萌芽期という段階であり、理論の精緻化の余地が残っていた。例えば、動機づけ研究への援用に先行歴のある「社会文化理論(Sociocultural Theory: SCT)」や SCT を理論基盤とする「活動理論(Activity Theory: AT)」(Engeström, 1999)との異同の精緻化であった。また、研究当時には理論援用の萌芽期であった、複線経路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach, TEA)(Sato et al., 2009)を本研究の理論比較に加えた。TEAは人間の成長過程を非可逆的時間軸で捉え、等至点(Equifinality point)と分岐点(Bifurcation point)という概念を使い、その軌跡を文化・社会から受ける力(社会的方向づけ: Social direction, 社会的助勢: Social guidance)で説明する。この手法は、CDSTにおける attractor の概念と重なりを感じるが、その異同に関する実証研究は当時まだ皆無であった。

2. 研究の目的

本研究は、学校英語教育における動機づけを、中等教育課程の教室を対象として長期間参与観察によって解明する質的研究である。具体的には、観察事象を主体者(授業者・学習者)と地域性(日本・中国・韓国)に着目し、動機づけに関する4つの理論(複雑系理論(CDST)・活動理論(AT)・複線経路等至性アプローチ(TEA))によって、東アジア3か国の教師と生徒の動機づけの差異、同じく国家間の専門職としての教師の成長の差異、これらの差異と国家間の英語教育事情との関係性を解明する。そして、最終的には4つの理論による動機づけモデルの比較・検証を介して、動機づけ研究に援用する理論の精緻化を目的とした。

3. 研究の方法

本研究は4年間の研究期間とコロナ禍による2年間の研究延長期間を含め、表1の「年次進行計画表」に従って日本、韓国、中国のそれぞれの現地での研究打合せ、現地参与観察から学会発表・成果公表までの一括実施を計画した。研究手順については、図1の「授業参与観察とデータ分析手順」に示した通り、参与観察記録は特定の学習者に焦点化したビデオ画像と、授業全体のビデオ画像の2種類を収集した。特定の学習者はデータ収集期間同一に固定した。データ分析手続きについては、図2の「データ分析手続」に示した通り、収集したビデオデータから、半構造化インタビューを準備し、中国と韓国での参与期間中は出張期間中に授業者と学習者へインタビューを実施した。その内容を全て文字化したナラティブデータを作成し、質的データ解釈ソフト(NVivo)を使いながら、3か国の教室の教師と学習者の動機づけを質的に解釈する計画とした。

表1は、4年間の研究期間(2017年4月～2021年3月)と新型コロナの世界的蔓延のための2年間の研究延長(2021年4月～2023年3月)を反映したものである。具体的には、研究延長した2021年4月～2022年3月、2022年4月～2023年3月の2年間を含め、日本を含めた韓国、中国での現地調査に甚大な影響が及び、特に中国と韓国への渡航は実現しなかった。

日本のサイトは、本研究から学校の英語科全体の協力を得ることができた。研究開始時期から

同一の焦点化生徒(Focus Students; FS)4名を軸に、この4名を教える4名の教師の協力を得ることができた。

日本

	H29(2017)年度	H30(2018)年度	H31/R01(2019)年度	R01(2020)年度	R02(2021)年度	R03(2022)年度
観察	5-2月 教師4名 4FS	4-2月 教師4名 4FS	4-11月 教師4名 4FS	-	-	-
分析	期間中継続	期間中継続	発表前集中			発表前集中
発表			AAAL Atlanta 58 th JACE			61 st JACET Kimura(2023)

中国

	H29(2017)年度	H30(2018)年度	H31/R01(2019)年度	R01(2020)年度	R02(2021)年度	R03(2022)年度
観察	9/18-21 3/16-21 教師2名	9/17-21 3/1-8 教師2名	5/13-17 教師2名	-	10/19, 10/25 オンライン 教師2名	-
分析	期間中継続	期間中継続	期間中継続	期間中継続	発表前集中	
発表		PLL3Waseda			AILA 2021	

韓国

	H29(2017)年度	H30(2018)年度	H31/R01(2019)年度	R01(2020)年度	R02(2021)年度	R03(2022)年度
観察	7/3-4 3/12-13 教師1名	11/29-30 教師1名	11/4-8 教師1名	-	11/2, オンライン 教師1名	-
分析	期間中継続	期間中継続	発表前集中	期間中継続	期間中継続	期間中継続
発表			AAAL Atlanta			

表1：年次進行計画表

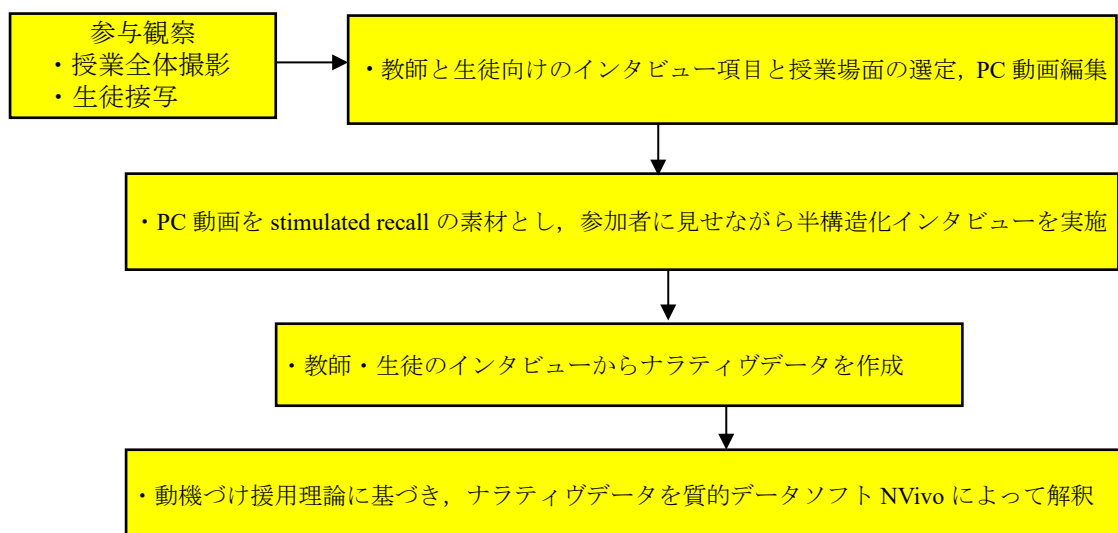


図1：授業参与観察とデータ分析手順

4. 研究成果

(1) 外国語学習の動機づけ研究理論としての CDST 援用の深化について

本科研研究期間中, CDST に関する知見は世界的な進化を遂げた。とりわけ言及に値するのは、

CDST をメタ理論として捉えた論考(Hiver & Larsen-Freeman, 2020)であり, CDST を背景理論とした研究方法論の確立(Hiver & Al-Hoorie, 2020))である。本研究においても、例えば Kimura (2018) において、北京における教師 2 名の英語授業の動機づけを CDST と TEA の 2 つの理論によってその読み取りの差異を発表した。当時は CDST と TEA との理論的関係性を吟味するまでには至らず、それぞれの理論で独立した解釈を展開した。例えば CDST による教師 2 名の英語授業の動機づけは、各教師が居存する system をインタビューデータから解釈し、それらの教師がどのような system に位置しているのかを描写した。この解釈手法は、本科研研究期間中に発刊となった編著の中の Kimura (2022a) で論じたアプローチである。一方、同じデータを TEA (研究当時は TEM として表記) で解釈した結果、どの時点で各教師が分岐点を経験し、その分岐点を介して教師としての英語授業への動機づけがどのような経路を辿って変遷したかが浮き彫りとなった。ただ、CDST と TEA との関係性にまでは考察は及ばず、結論が曖昧なままとなった。

(2) TEA による教師の英語授業への動機づけの解釈

2 名の英語教師の英語授業に関する動機づけを TEA によって解釈し、Kimura (2019) で口頭発表した。この口頭発表は、Kimura (2018) の研究成果を踏まえつつも、CDST との比較に加重するのではなく、TEA による教師の英語授業への動機づけを、Kimura (2018) の参加教師とは別の 2 名の長期インタビューを解釈した。その結果、2 名の教師の英語授業への動機づけが、それぞれ共通した必須通過点と最終的な等至点を通過しながらも、異なる分岐点を経て異なる径路で変遷し、教師として成長していく道程が明らかとなった。

(3) AT, CDST, TEA による 2 名の英語教師の動機づけの解釈

(1) と (2) の結果を踏まえ、Kimura (2021) においては、CDST と TEA に加え、2 名の英語教師の授業への動機づけを AT によっても分析した。この結果、AT による 2 名の英語教師の動機づけは教師個人内の分析に留まったことから、第三世代の AT、すなわち、複数個人の相互作用分析に援用される AT を使用できなかったため、静的な分析に留まった感があった。このことは、基盤研究(C) 25370688 の助成研究であり、生徒のグループ活動を AT と CDST の 2 つの理論で分析し口頭発表した Kimura (2015) とは極めて異なる結果となった。

(3) 5 つの理論の批判的検証について

以上の結果を踏まえ、これまで口頭発表でのみ取り組んできた複数の理論による英語教師の授業への動機づけについて、理論的な考察の必要性を感じた。そこで、Kimura (2022b) とこの口頭発表を論文化した Kimura (2023) において、CDST をメタ理論としつつ、L2 Motivational Self-System, AT, DMC, TEA と CDST との関係性を論じた。この結果、TEA を除く全ての理論で CDST が上位概念として位置づいている点を論じた。また、CDST と TEA の関係性については、現時点でどちらがメタ理論として捉えられるのか、そもそも学術分野で発現・進化してきたこれら 2 つの理論のメタ理論性を論じることが出来るのかという点を含めて、今後の第二言語学習の動機づけ研究の成果を追随する必要があることを論じた。

References

- Dörnyei, Z., MacIntyre, P. D., & Henry, A. (Eds.). (2015). *Motivational dynamics in language learning*. Multilingual Matters. <https://doi.org/10.21832/9781783092574>.
- Engeström, Y. (1999). Activity theory and individual and social transformation. In Y. Engeström, R. Miettinen, & R.-L. Punamäki (Eds.), *Perspectives on activity theory* (pp. 19–38). Cambridge University Press.
- Hiver, P., & Al-Hoorie, A. (2020). *Research methods for complexity theory in applied*

- linguistics*. Multilingual Matters. <https://doi.org/10.21832/HIVER5747>
- Hiver, P., & Larsen-Freeman, D. (2020). Motivation: It is a relational system. In A. H. Al-Hoorie & P. D. MacIntyre (Eds.), *Contemporary language motivation theory: 60 years since Gardner and Lambert (1959)* (pp. 285–302). Multilingual Matters. <https://doi.org/10.21832/9781788925204-018>
- Kimura, Y. (2015, March 21–24). *Two different pathways of L2 motivation? Further examination in AT and DST perspectives* [Paper presentation]. The American Association for Applied Linguistics Toronto, Canada.
- Kimura, Y. (2018, June 7–10). *Similar trajectories in different landscapes? Viewing L2 teacher motivation from two theoretical lenses: TEM and DST* [Paper presentation]. The 3rd International Psychology of Language Learning Conference, Tokyo, Japan.
- Kimura, Y. (2019, March 9–12). *Similar trajectories in different landscapes? The advantage of examining L2 teacher motivation using TEA compared with CDST* [Paper presentation]. The American Association for Applied Linguistics, Atlanta, GA, United States.
- Kimura, Y. (2021, August 16–20). *The same peak from different routs: Illuminating L2 teacher motivation via TEA, CDST, and AT* [Paper presentation]. AILA 2021 Virtual Congress, Online.
- Kimura, Y. (2022a). L2 Teacher motivation/autonomy as complex systems: Across the boundaries of L2 classrooms in East Asia. In Y. Kimura, L. Yang, T.-Y. Kim, & Y. Nakata (Eds.), *Language teacher motivation, autonomy and development in East Asia* (pp. 111–133). Springer. https://doi.org/10.1007/978-3-030-93467-5_7
- Kimura, Y. (2022b, August 24–26). *The “meta-theory”: Can it be applied to CDST over TEA in L2 learning motivational studies?* [Paper presentation]. Japan Association of College English Teachers The 61st JACET International Convention, Online.
- Kimura, Y. (2023). L2 motivation theories from metatheoretical perspective: A critical review of CDST, L2 Motivational Self-System, AT, DMC, and TEA. *The Journal of Liberal Arts and Sciences, University of Toyama*, 4, 1–26.
- Larsen-Freeman, D., & Cameron, L. (2008). *Complex systems and applied linguistics*. Oxford University Press.
- Sato, T., Hidaka, T., & Fukuda, M. (2009). Depicting the dynamics of living the life: The trajectory equifinality model. In J. Valsiner, P. C. Molenaar, M. C. D. P. Lyra, & N. Chaudhary (Eds.), *Dynamic process methodology in the social and developmental sciences* (pp. 217–240). Springer. https://doi.org/10.1007/978-0-387-95922-1_10

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kimura Yuzo	4. 巻 4
2. 論文標題 L2 Motivation Theories from Metatheoretical Perspective : A Critical Review of CDST, L2 Motivational Self-System, AT, DMC, and TEA	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 富山大学教養教育院紀要	6. 最初と最後の頁 1~26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15099/00022249	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Kimura, Y.
2. 発表標題 The Same Peak from Different Routes: Illuminating L2 Teacher Motivation via TEA, CDST, and AT.
3. 学会等名 AILA World Congress (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kimura, Yuzo
2. 発表標題 Examining Language Teacher/Learner Motivation in TEA Perspective
3. 学会等名 Japan Association of College English Teachers (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村 裕三
2. 発表標題 「韓国大学入試制度と高校英語教育 - ある韓国中堅英語教師の語りからの示唆 - 」
3. 学会等名 全国英語教育学会 (JASELE) 大学共通テストシンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kimura, Yuzo
2. 発表標題 The Same Peak from Different Routs: Comparing L2 Teacher Motivation by TEA, CDST and AT
3. 学会等名 World Congress of Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kimura. Y.
2. 発表標題 Similar Trajectories in Different Landscapes? The Advantage of Examining L2 Teacher Motivation Using TEA Compared with CDST
3. 学会等名 American Association for Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuzo Kimura
2. 発表標題 Similar Trajectories in Different Landscapes? Viewing L2 Teacher Motivation from two theoretical lenses; TEM and DST
3. 学会等名 Psychology in Language Learning 3 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Yuzo Kimura, Luxin Yang, Tae-Young Kim, & Yoshiyuki Nakata	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 226
3. 書名 Language Teacher Motivation, Autonomy and Development in East Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	元 璋浩 (Won Jang-ho)		
研究協力者	文 偉 (Wen Wei)		
研究協力者	陳 川 (Chen Chong)		
研究協力者	ローレンス ワン (Lawrence Wan)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関